

中国医科大学訪問記

秋田大学 大学院医学系研究科 消化器外科
教授 山本雄造

このたび、平成21年4月14日より18日まで、笹川記念保健協力財団と中国医科大学の共同プロジェクトである中国の貧困地域の医療従事者を対象にした再教育プロジェクトの一環で、肝臓外科専門家として中国医科大学の肝胆乳腺外科で講演する機会をいただき、同大学並びに中国医科大学第二附属病院（盛京医院）を訪問して参りました。

事の始まりは戴朝六教授が12年前に笹川研究者の第18期生として京都大学第二外科に留学していたことに始まります。当時、私は京都大学第二外科で助手を務めており、戴先生と一緒に研究をしていました。12年の歳月を経て、戴先生は中国医科大学・肝胆乳腺外科の主任教授となり、私は秋田大学大学院医学系研究科消化器外科の教授をしています。戴先生は昨年9月より笹川記念保健協力財団の協力で設立された中国医科大学再教育センターにて遼寧省朝陽市の外科医である李曉軍先生を指導されています。そこで、講師として私に声をかけてくださったという次第です。

私の中国訪問は3回目で、過去に学会で重慶と新疆を訪問しましたが、中国における医学教育・医療の現場は今回が初めての経験でした。戴先生をはじめ、秋田大学への留学生から、中国の病院設備は日本ほど先進的ではないと聞いていましたが、実際のところは想像の域を超えず、今回の訪問は私にとって非常に有意義なものでした。まず、驚いたのは附属病院の大きさです。中国医科大学には4つの附属病院があり、第一院と第二院はそれぞれが2000床以上の超巨大病院で合計5500床を超える規模でした。どの病院をとっても30階近い高層ビルで、院内はすでに電子カルテ化されているなど、とても近代化されていました。「700万人の瀋陽市の人口に対して、これだけの大きな大学附属病院の役割は？」と尋ねると、中国ではがん治療に関しては未だ地域病院では手に負えないことが多く、500—600km離れた地方からもがん治療のためには医科大学の附属病院に患者が集まるために、遼寧省の4000万人を超える住民や周辺の黒竜江省の住民の医療を支えるための中核としてこれでも不十分だということでした。中国のスケールを感じずにはいられない大きさです。手術数も極めて多く、戴教授が所属している第二院だけでも肝切除が1日に2-3例、臍頭十二指腸切除が3-4例に及ぶこともあるそうです。戴教授は土曜、日曜の休日にも関連病院での手術指導を頼まれて、なかなかプライベートな時間をとれないほどの忙しさだといっておられました。卒業生はこれらの **high volume center** で教育を受けた後に周辺地域の病院に派遣されて行くとのことでした。外科医教育の効率から考えると手術の件数がそれほど大学病院に集中しているのは理想的な感がありますが、一方で、医学部が全国随所に存在する日本に比べると中国ではがん治療の均霑化が極めて遅れている事情を反映しているともいえます。今、日本の外科医教育で **high volume center**

の意義が議論されているところではありますが、その裏腹で若手医師の都会集中が進み、専門医制度の導入等、がん治療の均霑化を図ったはずの政策で地方医療が崩壊してどこか似た構図になりつつあるのは皮肉なものです。

今回の講演では私の専門分野である肝胆膵外科の日本における臨床の現状を「肝胆膵外科と秋田での5年間の経験」と題して、また、外科研究の分野を「外科的肝臓虚血と最近の知見」と題して2日間にわたり、それぞれ2時間ずつお話ししました。どちらの講演にも50人を超えるスタッフや大学院生が参集してくださいました。私の英語が十分でないことと、中国医科大学では日本語で医学教育を受けている人がいることや、李先生によく理解していただくことなどを考えて、戴教授と協議の上、日本語で講演を行い、戴教授が中国語に通訳をするというスタイルになりました。・・戴教授の日本語は京都大学留学時代から完全に近いものでしたが、帰国されてから10年も経過しているのに、さらに洗練され、日本人と話しているのと全く変わらないのには正直驚きました。このため、通訳も同時通訳に近いレベルで行われました。・・戴教授のこの通訳のおかげで、長時間にもかかわらず、皆さんが熱心に聞いてくださり、講演後にも有意義な討論を行うことができました。中国人の科学に対する熱意がひしひしと伝わり、日本人は見習わなければいけないと感じた次第です。秋田県は日本の地方都市であるがために、がんが発見時に進行している症例が都会よりも多いことが中国の現状に似通っていることや、かつて日本で多かったB型肝炎による肝細胞癌の発生がどのようにして抑制できたのかなどに興味を持たれました。また、標準手術では根治できない症例に対して先進的な手術を行ったあとのフォローアップの結果を話したことに対しての評価が高く、現在の中国では押し寄せる患者の手術をこなすのに精一杯で、術後の患者を追跡することができていないことに問題意識を感じるとの発言もありました。手術の多すぎる弊害として日本のように一つの手術に十分な時間をかけられないこともあり、がんのリンパ節郭清などにおいても我々ほど徹底して行うことができていないようでもありました。この後、手術室も見学させてもらいましたが、少なくとも、中国医科大学の附属病院では設備は日本のそれと大きく変わらないようであり、今後、協力してゆくべきは医療に対するコンセプトの意見交換ではないかとの感じも受けました。しかし、研修生である李先生によると、貧富の差や都市と地方の差が激しい中国では朝陽市の病院（やはり1000床）と大学附属病院では設備がかなり異なるとの話であり、今回、見学した盛京医院は中国の最高峰の1つであって、真の実情は地方都市の病院を見てみないとわからないのかもしれないかもしれません。今回の短い滞在では果たすことができませんでしたが、機会があれば彼の勤める病院も訪問したいものです。いずれにせよ、彼らは現状を良しとしているのではなく、改善すべき点は把握した上で、中国の社会の実情と摺り合わせながら最善を尽くしているのは確かでした。

滞在3日目には李先生を含めた戴教授の教室の若い先生や大学院生と歓談する機会を設けていただきました。昨今の日本では外科はきつい、汚い、危険の3Kがそろった分野といわれ、外科医を目指す若者が毎年1000人ずつ減少し、外科崩壊が叫ばれていますが、

中国では外科医に憧れている医科大学卒業生が多いとのことで、実際、彼らのエネルギーに圧倒されました。そのような環境の中で、かつて共に研究生活を送った戴先生が帰国笹川研究生として母校の外科教授となり、彼の日本留学の苦労話も交えながら、自分たちの臨床や研究を世界に発信するためには英語で国際雑誌に論文を書かなければならないことを後進の若者に向かって一生懸命説いているのも印象的でした。さらには、「最近の若者は煽てながら教育しないとついでこない」という話から、非常に温厚な彼が、「厳師出高徒」や「ある程度の威厳」が重要であることなども教室の中堅医師に指導している場面もあり、このあたりの時代の流れは同じだなあと感じたものでした。

今回の訪問の仲介をいただいた中国医科大学国際交流センターの才所長、並びに滞在中の通訳を始め、案内をいただいた王琛氏に深謝いたします。さらには、お時間を割いて盛京医院の構想についてご説明いただいた郭病院長や夏名誉教授に心からお礼申し上げます。これらの方々が留学等を介して皆さん訛りのない日本語を話されることも私にとってはストレスなく滞在させていただいた大きな要因であり、これを機会にさらなる交流を進めていくための勇気にもなりました。

最後になりますが、今回の機会を与えていただきました笹川記念保健協力財団にお礼申し上げますとともに、このプロジェクトは中国医科大学において極めて有意義に活用されていることを報告申し上げます。今回、再教育プロジェクトの対象であった研修生の李先生とのみならず、帰国笹川研究生の戴教授が率いられる教室の多くの先生方との交流も深めることができ、私にとりまして非常にありがたい経験をさせていただきました。今後こうした援助により、我々、医療界がお互いの正しい現状理解の上で、日中相互交流を深めると共に刺激しあえるように、本プログラムの継続をお願い申し上げます。

平成 21 年 5 月 7 日





